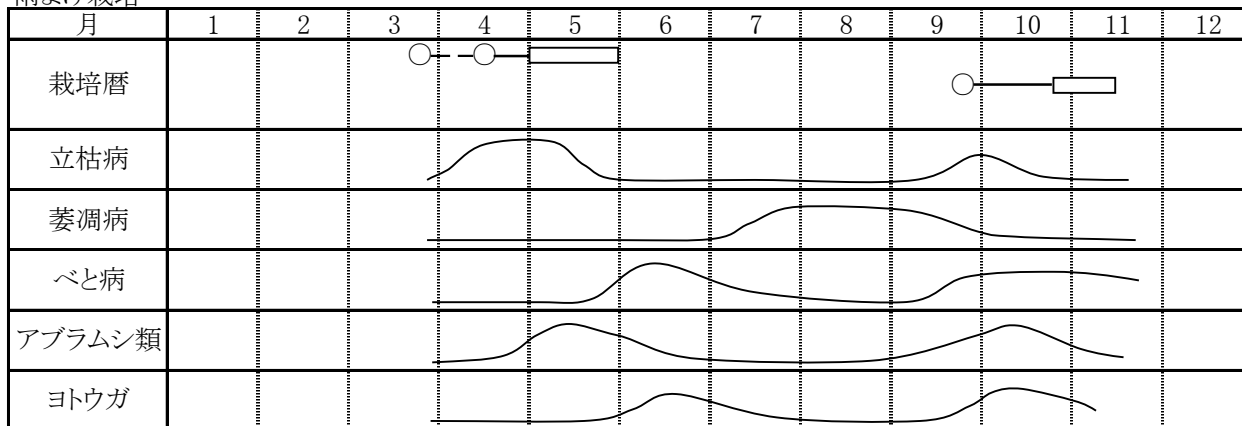


(22) ホウレンソウ

1 主要な作型及び病害虫の発病・加害時期

雨よけ栽培



○は種 ■ 収穫

2 主要病害虫別防除方法

農薬による防除については、栽培ステージ、病害虫の発生状況等に応じて、散布、灌注、土壌消毒などを行う。

なお、農薬による防除の際は、農薬登録内容や使用上の注意等を遵守して実施する。

(農林水産省農薬登録情報提供システム <https://pesticide.maff.go.jp/>)

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
モザイク病 (CMV, BetMV) えそ萎縮病 (BBWV)	①ほ場近くの越年罹病作物や雑草を除去する。 ②春秋にアブラムシの多発が予想される場合には、は種から1か月程度防虫ネットを被覆し栽培を行う。ハウス栽培では、開口部を目合い1mm以下の防虫ネットでふさぐ。 ③ハウス栽培では、紫外線カットフィルムを使用する。 ④光反射マルチをし、畝上にはシルバーテープを張る。 ⑤肥切れさせない。 ⑥発病株を早期に処分する。 【参考事項】 モザイク病は、主にキュウリモザイクウイルス(CMV)、ビートモザイクウイルス(BtMV)、えそ萎縮病はソラマメウイルストウウイルス(BBWV)の感染によって起こる。いずれもアブラムシ類が媒介する(ウイルス病の伝染方法の項参照)。
立枯病(苗立枯病含む) (Pythium)	①連作を避ける。 ②完熟堆肥を施用し、土質改善する。 ③太陽熱利用による土壌消毒を行う。 ④移植栽培は、発病軽減に効果がある。 ⑤発病株を除去し、焼却するか土中深く埋める。 【参考事項】 立枯病の病原菌は4種が知られ、地温など栽培環境により優占種が異なるが、概して地温20～35℃で多湿となる6～8月に発生が多い。
株腐病(苗立枯病含む) (Rhizoctonia)	①連作を避ける。 ②完熟堆肥を施用し、土質改善する。 ③太陽熱利用による土壌消毒を行う。 ④移植栽培は、発病軽減に効果がある。 ⑤発病株を除去し、焼却するか土中深く埋める。 【参考事項】 株腐病は高温期の発生が多く、特に多湿となりやすい6月、9～10月に発生が多い。
萎凋病(苗立枯病含む) (Fusarium)	①連作を避ける。 ②完熟堆肥を施用し、土質改善する。 ③太陽熱利用による土壌消毒を行う。 ④移植栽培は、発病軽減に効果がある。 ⑤発病株を除去し、焼却するか土中深く埋める。 【参考事項】 萎凋病の発病適温は25～30℃で、6～8月の高温期に発生が多い。

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	
べと病 (<i>Peronospora</i>)	①べと病抵抗性の品種を用いる（発生している病原菌のレースに合わせた品種選択を行う）。 ②多発、常発地では2～3年間は他作物を栽培する。 ③雨よけ栽培をする。 ④厚播きせず、間引きを十分に行って、密植とならないようにする。 ⑤排水を良好にする。 ⑥窒素肥料の過用を避け、カリを十分施す。	
	【参考事項】 べと病の発病適温は8～18℃で、秋播き栽培では10～12月、冬～春播き栽培では3～5月に発生が多い。	 ホウレンソウべと病
炭疽病 (<i>Colletotrichum</i>)	①多発、常発地では2～3年間は他作物を栽培する。 ②雨よけ栽培をする。 ③厚播きせず、間引きを十分に行って、密植とならないようにする。 ④排水を良好にする。 ⑤窒素肥料の過用を避け、カリを十分施す。	
	【参考事項】 炭疽病の発病適温は10～25℃で、春播き栽培では4～5月、夏播き栽培では7月上旬～中旬、秋播き栽培では9月下旬～10月中旬に発生が多い。採種用では2月中旬～3月に発病が多い。 9～11月に雨の多い年に発生する。	 ホウレンソウ炭疽病
ミナミキイロ アザミウマ	①紫外線除去フィルム、シルバー寒冷紗などの被覆資材は忌避・侵入防止効果がある。 ②収穫終了後、残さや周辺の雑草なども含め、古ビニルなどで覆って1週間以上太陽熱処理を行う（6～9月）。	
	【参考事項】 ナス後作の雨よけ栽培で多発する。 ほ場周辺でナス、ピーマン、スイカ、キュウリなどが栽培されていると、これらが発生源となり多発することが多い。	
アブラムシ類	①露地栽培では、は種から収穫1週間前まで、透明不織布をべたがけする。 ②光反射マルチをするか、シルバーテープを張る。 ③周辺雑草を除去する。	
	【参考事項】 ウイルスを伝搬するので、生育初期の飛来防止が重要である。	
ヨトウムシ、 ハスモンヨトウ	①施設栽培では開口部に防虫ネットを張り、成虫の飛来を防止する。 ②ほ場内を見回り、卵塊及び分散前の若齢幼虫を捕殺する。	
	【参考事項】 ヨトウムシは5～6月頃と9～11月頃に発生が多い。 ハスモンヨトウは8～10月頃に発生が多い。	